

ゴムぞうり上で成長したマガキ (二枚貝綱、イタボガキ科)

太田 満・久保田 信

マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG) は日本全国の内湾などで普通に見られ、食用としてもおなじみの二枚貝である。和歌山県田辺湾においても、マガキは湾内の岩礁域全域で見られる(原田・小松, 1995)。田辺湾では、岩礁以外では、転石上やコンクリート製の岸壁や杭などにも密集して付着している。また、状況によっては、養殖筏のロープ、漁網、プラスチック製の浮き、発泡スチロール製の浮きを包むビニールなどの上や長くおかれた船底にも着生している。今回、田辺湾の湾奥にある小規模の干潟でその一端が埋もれたゴムぞうり上に成長した生きたマガキを発見した。このような不安定で小さな基質上でもチャンスがあればマガキは付着・成長できる例として報告する。

ゴムぞうり上で成長したマガキ(図1)の記録

採集年月日 1998年3月24日



図1: 和歌山県田辺湾の干潟で一端が埋もれたゴムぞうり上に成長したマガキ

採集場所 和歌山西牟婁郡白浜町立ヶ谷の干潟
基質 長さ140mm、最大幅72mmのゴムぞうりで、斜めに傾斜し、かかとの部分が自然に砂泥底に埋没。

マガキの大きさ

右殻は殻長63mm、最大幅57mm、左殻の高さは最大で30mm。

その他 本個体は採集時生きており、その後の簡易な飼育下でも4ヶ月間生存した。また、基質のゴム上には他の一個体のマガキが付着していた跡がある。

考察

マガキは基質特異性がなく、上記のように田辺湾では様々な基質上でみられるが、本個体のような例はきわめて稀であろう。このようなケースが可能になった状況を推察する。発見場所の干潟は湾奥にあり、ここは台風時に船が避難する場所となっているほど、波静かな入り江を前面に控えている。従って、古い型のゴムぞうりが自然に干潟に埋まり、波で洗い出されることもなくそのような状態が経過してゆく間に、マガキが少なくとも2個体付着し、その内の1個体が採集時まで成長したのであろう。おそらく本個体は少なくとも2年を経た年齢であろう。

参考文献

原田英司・小松 結. 1995: 田辺湾域における潮間帯岩礁性動物の分布. 瀬戸臨海実験所年報, 8, 24-34.

(京都大学大学院

理学研究科附属瀬戸臨海実験所)